

「空前の大事業

上水道敷設 〈前編〉」

市は、明治38年に藩政時代から使用している冷水水源地の改装工事を実施し、新たに城山に配水池を造って簡易水道を設営した。

しかし、一日の湧水量は約2400立方メートルにすぎず、大門口、小坂通り、いづろ通り、易居町一体と船舶給水所に配る量を確保するのが精いっぱいだった。

当時の有川貞寿市長は、水道については当初、下水道を優先させる考えであったが、当時の経済発展とまちづくり上の必要性という観点から、上水道敷設を優先した。

具体的には、同年12月の鹿児島港の改修工事の完工および同港の出船の増加により、船舶用水の確保対策が急務となったこと（当時は、政府に鹿児島開港の陳情を繰り広げている時もあった）。もう一つは、鉄道が開通し、発達したことである。同42年12月に鹿児島―八代間に肥薩線が開通して東京へ直行で行けるようになり、水の需要が増加した。

また、大正2年10月には川内線鹿児島―東市来間も開通し、人と物の流れが活発になると、市内の人口増加が目立ち始めた。同年には、山下町にたばこ専売支局分工場（従業員約1500人）が開設されるなど、市のまちづくりは、古い城下町から近代的な市街地形成への転換期を迎えていた。

大正2年3月の市会（市議会）議員選挙後、市会は、同年7月に水道委員会を設置。市長も、国との間で国庫補助、起債の交渉を開始した。そのさなか、同年11月に市長が急死し、翌3年1月には桜島が大爆発。上水道敷設は棚上げの状態となっていた。



鹿児島島の古い配水池の一つ・上之原配水池